

夫が体に触ってくれなくなっただけからどのくらい経っただろうか。理由に見当はついている。帰りが遅くなった、休日になんか理由をつけて不在になる。きっと私以外の女性と会っているのだろう。悔しいとか、怒りとか、そんな気持ちが湧く前に、なんとなく諦めのような気持ちになるのは、ひとえに自分の自信の無さが原因だ。

まだ夫と関係を持っていたころにチラリと言われたことがある。

「そんなマグロみたいな受け身じゃなくて、お前も楽しめよ」

夫とのセックスが嫌だったわけではない。真面目な両親のもとで育った私には、分からなかったのだ、楽しむということが。今になつて気づいても、夫の心は遠く離れ、修復することは果てしない困難に感じる。

虚しい気持ちになりながら、手元のローターの電源を入れた。ブ
ブツと音がして、秘部にズズズと埋まっていく。

「ふあっ……♡♡♡」

愛液を垂らすその場所でツルリとした張り型が揺れる。乳首を
キュツ♡と摘むと肉筒がムギユムギュとローターを食んで奥へ奥へと
飲み込んでいく。

皮肉だと思うが、夫に触れられなくなってから私はこの遊びにのめ
り込んだ。夫はたいてい夜遅く帰ってくるか、外泊も多いので、安心
して私は性具を使って楽しむことができる。

あまりにも性具を使うことに慣れきってしまった。……そう言ったら言い訳になる
その日は、ふと魔が差してしまった。……そう言ったら言い訳になる
だろうか。

「ピンポーン」

玄関で、呼び出し音が鳴った。きっとインターネットで注文していた化粧品でも届いたのだろう、そう思った。

私は慌ててはだけていたロングスカートを下ろし、ローターを膝に入れたままショーツを引き上げて玄関に向かった。もちろん、そんなはしたないことをするのはこれが初めてだった。配達員さんの前で、性具を入れたままにいるスリルを少しだけ味わってみたい。そんな出来心だった。

「はい」

印鑑を手に玄関の扉を開ける。

「え……お、お義父様……」

てつきり配達員さんだと思ったのに、玄関の前に立っていたのは夫の父だった。

「○○さん、久しぶりだね」

六十代の義父は、ロマンスグレーの髪を綺麗に整えて、長身を屈めるようにして玄関に入った。

「お、久しぶりです……」

元はと言えば、この家は彼の居宅だった。妻を早くに亡くし、仕事も引退した為、のびのびと好きな場所で暮らしたいと、長男である夫にこの家を譲り、避暑地で有名な高級住宅地に引っ越して行っただのが数年前。

「こちらに出てきたついでに庭木の様子を見ておこうと思ってね。連絡もなく申し訳ない」

柔和な顔で微笑みながら、有名な老舗和菓子店の袋を差し出される。

「い、いえ。連絡なんてそんな……こちらはお義父様の生家なんですから——」

袋を受け取りながら、慌ててスリッパを取り出そうとしやがんだ瞬間。

「あっ♡」

膣の中に入れていた性具がグチュリとその存在を主張する。

「○○さん？」

「え、あ♡すみません、お義父様……」

「どうかしたのかい？体調でも……」

「いえ♡大丈夫です。どうぞ上がってください♡♡♡」

義父をリビングへと通し、茶の準備をする間中、気が気では無かった。膾の中に仕込んだままのローターが一步一步と歩きたびにその存在を主張してくるからだ。

「んっ♡♡♡」

それに加え、ついさっきまで乳首を揉んでいたせいで、服が乳首に擦れるだけで体に甘い痺れが走る。体が快感を拾い始めたところで止めてしまったせいで、中途半端な快感が体の中で渦巻く。優しい義父には申し訳ないが、早く帰ってもらい、この続きがしたい。

「お義父様、お待たせしました」

そんな内心を顔に出さないように、茶をテーブルに置く。

「ありがとう、○○さんのお茶はいつも美味しいね」

「いえ、そんな……」

優しい義父が笑いかけてくれるたびに、夫がかつて私に向けてくれた笑顔を思い出し、少し切ない気持ちになる。若い頃はさぞモテただろうし、今も俳優顔負けの容姿を保っているので、現在進行形でモテているであろう。ジムで鍛えた体は鋼のようで、夫と顔は似ていても、義父の方がさらに男らしい体つきをしている。もしかしたら、いや、もしかしくなくても現役で女性と関係を持っているかもしれない。

義父が女性の体を抱き、力強く腰を打ち付けている様を思い浮かべてしまい、思わず赤面する。

「○○さん……大丈夫かい？」

「あ♡ごめんなさい、私ったら」

「ふふ、疲れているんだろう。悪いね」

「そんな……今どき仕事もしていない専業主婦ですから」

「そんなことを言うもんじゃないよ。あなたはしっかり家庭の仕事をしているじゃないか」

厳格な両親に厳しく育てられたせいで、幼少の頃からあまり褒められる経験がなかった。そのせいか、義父から手放しでこうして肯定されると、くすぐったいような、空っぽの部分が満たされるような、そんな気持ちになる。

「ありがとうございます、お義父様……」

「ふふ。君は相変わらず素直だね。どれ、本当に熱が無いか見てみよう」

義父が少し乾いた大きな手のひらを私の額に当てる。

「熱なんて……大丈夫です」

「無理は良くないよ。少し体温が高いし、頬もほてっているようだし。喉は……口を開けてご覧」

促されるままに、小さな子どものように口を開く。

「うーん……暗くてよく見えないね」

照明のリモコンを探そうとしたのだろう。義父が部屋をぐるりと見渡し、ピンクのリモコンを手にとる。

「あっ、お義父様、それは」

声をかけるのと同時に、義父は真ん中の丸いボタンを押してしまっ
た。

『ブブブブブ……♡♡♡♡』

「あっ♡♡」

静かな室内にバイブの音が響き、同時に急に振動し始めた胎内の
ローターに体を跳ねさせる。

「○○さん、大丈夫かい？」

義父が私の体を抱き止める。

「あ♡あ♡お義父様、ごめんなさい♡♡♡」

部屋の中に出しっぱなしにしていたローターのリモコンのことを、すっかり失念していた。

「い♡あ♡あ♡あ♡あ、あああん♡」

待ちかねていた快感に義父の腕の中で体を振らせる。

「○○さん」

「お、お義父様ああ♡♡♡♡♡それ、ボタン、止めてくださ…♡♡♡」
義父の固い胸に抱き止められながら、息も絶え絶えに懇願する。

「これか？」

義父が真ん中のボタンを押すと、ブブブブ♡♡♡と音を立てていたバイブが、さらに激しく震え出す。

「あ♡あ♡ダメえ♡♡♡♡」

ブーブーブーブブブブ♡♡♡♡♡♡

ブツ♡ブツ♡ブツ♡ブツ♡ブツ♡ブー————♡♡♡♡♡♡

義父が真ん中のボタンを押すたびに振動の仕方が変わるだけで、バ
イブは止まらない。

「いやっ♡気持ちいい♡お義父さまっ、止めて♡」

股の間から愛液が吹き出して太ももを伝っていく。

「○○さん、こんなに震えて。お腹が辛いのかい？」

震える顎で何度も頷く。

「ちよっと失礼するよ」

義父が洋服の上から腹に手を当てる。義父の掌の下で振動を続ける。バイブがゆっくりと押さえつけられて、狭い膣の中で存在を主張する。

(ブーブーブー♡♡♡ブブブブ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡)

「お、とう、様……♡♡♡」

「こ、れは……」

涙に潤んだ目で義父を見上げる。

「いあ♡♡♡私っ、こんなこと……恥ずかしい♡♡♡」

ぎゅっと目を瞑り、股を擦り合わせて顔を手のひらで覆う。そうしている間にも絶えずバイブは鳴り続けている。

(ブブブブブブブブ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡)

「○○さん、顔を見せてご覧。これはね、恥ずかしいんだよ」

「おとう様……?」

義父が優しく頷き、頬を撫でる。

「どれ、」

そう言うとき義父は私を横抱きにし、スカートの裾をそつと捲り上げた。

「お、とうさま…♡♡♡な、何を……?」

義父の手がシルクのスカートをスルスルと捲り上げ、太もも、それどころかレースのショーツが全て見える位置までたくし上げる。

「君は……なんて綺麗なんだ……」

ショーツは愛液でぐっしりと濡れ、白い太ももにまで愛液が伝っているというはしたない状態なのに、義父は息を吞んで私の体を眺めた。

「は♡あ♡♡♡あ♡♡♡」

(ブブブブブブブブブブ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡)

ローターがその場所を知らせるように体の奥で震えている。義父の指先がぷっくりと盛り上がった部分の割れ目にグツと押し当てられると、ぬかるむほどに愛液が溢れ出す。

「あ、すみませ♡お義父様……指を汚してしまいました……♡♡」

「なにを言っているんだい……透明でトロトロしていて、とっても綺麗だよ」

義父がショーツの隙間から指を差し込み、グチュグチュと音を立ててそこをかき回す。突然訪れたダイレクトな刺激に目の前がチ力チ力と白くなった。

「あ♡♡♡あ、気持ちっ♡♡♡」

「○○、もっと気持ち良くなりたいかい？」

呼び捨てで名前を呼ばれ、子宮がキュンと甘く疼く。

[illegible]

「は、はい…♡」

そう答えると同時に、義父が私のジュークジュークのシヨーツを躊躇なく引き下ろす。

「あ……♡♡♡」

思わず、両手でその場所を隠すと、手首を掴まれた。

「隠してはいけないよ、○○。○○のおまんこは、とっても綺麗なんだから。どれ、私がたくさん可愛がつてあげよう」

義父から「おまんこ」という言葉が出てきたことに驚きつつ、体を褒められたことに嬉しくなる。

「本当に……？ 私の……おまんこ……可愛がつてくださるんですか……」